桂坂にて

朴　正一

五〇年ぐらい前に、私は時がゆるしてくれるならば、京都に一日でも長くいたいと思ったことがあった。

そして五〇年後に京都に移転した。三年過ぎた今、その時のことを振り返ってみると、古都に移って来てから、自然を近くにするようになった。桂坂に現れる鹿や猿の集団、猪や美しい声でさえずる鶯など、知らず知らずのうちにフレンドになっていった。木の葉のさざめきや時雨の雨音は自然界の諧調を伝えてくれた。日が沈み、あたりが暗闇の中に隠れる頃、遥か遠くに見える市街地の灯は、人間界の姿を宝石の輝きの中に包み込んでいた。朝は静かな景色の中に日文研の旗が揺らめいていた。構内の中庭には石柱が並びそれらは音楽的な旋律を奏でていた。小高い塔のような構えのある建物は、象徴的な存在であった。

ここを訪れてから、アメリカ大陸から、ヨーロッパから、中東からアジアなど、世界から訪れて来た碩学の人々に逢うことができた。私の在職している大学の研究棟の同じ階にも数十人の外国人の先生がいるが、顔をあわせる人は少なかった。ここでは一年近くいる間に、いろんな人が集まり散じて行ったが、そんな間に私も妻と二人で一年過ごした。

ここにいて、研究の場として忘れられない思い出を与えてくれた。まず、育んでくれた自然との係りの中から、サスティナビリティ（Sustainability）の考え方を想起した。また、ものと

人の移動というものを「盌」（わん）に光を当ててみてみた。人はお茶で酔うことはないが、茶碗に酔う人は多くいる。就中、一、井戸、二、楽、三、唐津と昔から言われている。京都の北山や東山文化は天目茶碗が中心であったが、侘茶が広がるようになると、高麗茶碗が注目され出した。所謂、高麗茶碗は朝鮮の地方の民窯で焼かれたものが、日本に伝世していったものだが、当時の数寄人や大名などに見立てられて、新しい価値観を持たれ、愛され、人々から尊敬されていった。井戸茶碗は、天に向かう線と、波打つ横の線があって、前者は内側に向かう力と外側への力の均衡があり、後者はまるで水を連想させるようだ。無作為の作為によるもので侘茶の無作為に通じるものがある。ファジィ（fuzzy）ということばがあるが、これら「盌」にはそういう特性があるように思われる。定規で計ったようなものではなく、遊びの空間のあるそんな中から、新たな創造が生まれ出るようなほっとした不思議な世界である。それから、日本語の造語力の凄まじさは驚愕に値する。例えば、井戸、伊羅保、三島、呉器、熊川、などに分類されているが、それらは更に、細分類され、因みに、井戸は大井戸、青井戸、小井戸、井戸脇、小貫入がある。伊羅保だったら、古伊羅保、黄伊羅保、釘彫伊羅保、伊羅保片身替といった具合になっている。一方、井戸茶碗は、私たちの国では二〇世紀の後半にできたネーミングでは「粗質白磁」であり、二〇世紀の前半の用例は「粗体白磁」であった。何故伊羅保と呼称されるのかは、多少の説明を要するように思われる。抑々、韓国では、クル（그릇）、サバル（사발）、サギ（사기、沙器）、トジャギ（도자기、陶磁器）、ワン（완、碗、盌、椀）といった言葉があるが、お茶のものだったらチャクル（찻그릇）、チャサバル（찻사발）などがよく使われている。日本語の用法のような茶碗の趣によってネーミングすることは少ない。高麗青磁の関連で緑青磁を「粗質青磁」とするかどうかという点は熟慮が必要だ。更に、圧巻で

ある井戸は謎が多い。単なる「盌」だけではなく、茶会記や箱書きを見ると伝世品を通して、遼々たる歴史が感じられる。昨今、グローバリゼイションの趨勢がみられるが、理論や計算などによって形成された社会や世界には、このような時空が大切であり、それらのユニークさの根源にあるものを認め合い、尊び、共感し合うことが必要だと思う。いずれにしても、人生に於いて、気に入った「盌」と一つでも巡り合いたいものだ。

桂坂から離れて帰国し、また元のモードに戻ったが、桂坂でのことはいつ迄も忘れないだろう。明日も井戸の謎を求めて、ミュージアムに宝探しに出掛けるつもりだ。

（釜山外国大学校日本語創造融合学部教授）